

中立公正な立場を貫きながら、信頼のより深い浸透をめざして。

平成17年7月7日、第102回食品安全委員会会合。発足二周年の節目の委員会の冒頭において、棚橋泰文食品安全担当大臣を迎えて、三年目に向けた意見交換が行われました。今回の特集では、その意見交換での内容をご紹介します。

この二年間の実績、そして新たな課題とは？



棚橋大臣

棚橋大臣:この二年間、食品安全委員会は、科学的知見に基づいた中立公正な立場から、素晴らしいパフォーマンスをあげていただいていると思います。これから三年目となるわけですが、今まで着実に信念を持って取り組んでいただいた食品健康影響評価（リスク評価）と、その結果を情報発信するリスクコミュニケーションについてのご努力をさらに進めていただいて、「食品安全委員会が考えることには信頼がおける」と国民の皆様と言っていただけるよう、二年間で培ってきた信頼をさらに確立していただくことを皆様をお願いしたいと思っています。

寺田委員長:リスク評価では、食品安全委員会が発足してから本年の7月6日まで



左から本間、寺尾、小泉委員

場を保ちつつ、諮問をする管理機関との連携や役割分担をどのようにしていくかということも大きな課題であると、私は思っております。そのような観点から、BSE問題で、今まさに精力的に審議されておりますプリオン専門調査会の吉川座長からご意見を。

吉川座長（プリオン専門調査会）:何よ



吉川座長

りも透明性を重んじながら、シナリオなしに審議をやってきた中で、いろいろ経験をさせていただきました。ただ、BSE

問題を議論してきたプリオン専門調査会を振り返ってみると、欧米型のリスク分析という考え方の中で、かなり明確になっているはずの管理部門と評価部門の役割分担が、日本では必ずしもまだその図式に乗っていないということも感じます。科学的にリスク評価することと、それを受けて管理機関が施策をとるということには違いがあります。しかし今は、その施策についても、私たちが消費者の代弁者として管理すべきかのような、そんな役割まで世論から負わされているような所があるんですね。だから今度の米国産牛のリスク評価の諮問も含めて、どういう関連や立場で諮問され、また答申していくのか、それを双方がどう国民に伝えていくのか、そのあたりがこれからの課題だと思っています。

国民のさまざまな立場を把握する必要性も

寺田委員長:国民とのリスクコミュニケーションですが、汚染物質専門調査会で魚介類等のメチル水銀についてリスク評価を行っていただきました佐藤座長にご意見を。

佐藤座長（汚染物質専門調査会）:メチ



佐藤座長

ル水銀の場合、水俣病という連想が働いたり、魚介類は日本人の食生活に大切なものなので、リスク評価ではそ

のような観点から気を遣ったような所はあります。ただ今回の場合、外国のデータではありますが、胎児期暴露の出生後の影響という「ヒトのデータ」がありまして、いちばん感受性が高い胎児をハイリスクグループとした結果、妊婦の方を対象に、ある程度わかりやすい形でリスク評価を行うことができたと思います（P4～P5参照）。メチル水銀は食生活において、非常に大事な魚が暴露源ですので、リスクコミュニケーションでは、魚にどの程度のリスクがあるのかということを理解していただくことが、非常に大事だと考えております。

寺田委員長:食品安全委員会が独自に行うリスク評価や研究事業を始めとする活動、また運営状況に意見を加えたりと、委員会全般の「お目付役」といった働きをする企画専門調査会の富永座長にお話を。



富永座長(企画専門調査会):企画専門調査会には16人の委員がおりまして、極端に言いますと16の立場を代表したものになります。立場上、極端に意見が対立する場合もありますが、二年経ち、なんとか離陸して水平飛行に移ってきたかな、というところですよ。この専門調査会では、食の安全に関して委員会が「自ら行う評価」の案件選定に関する審議をしています。感染症、微生物、農薬あるいは包装など、まだ安全性に統一見解が得られていないものを選び、その一部については情報を収集・整理集約してまとめ、食品安全委員会としてファクトシートを公表しています。



富永座長

リスク評価とリスクコミュニケーション、その新たな課題

見上委員:リスク評価ですが、日本人の発想にはなかなか確率論的な概念が入りこめないんですね。All or Nothing、白か黒かという発想がどうしてもつきまとう、それをなんとかしないといけないと思うんですね。リスク評価の基準は一つではなくて、食品によって相当差があるという、そういう概念が日本人の中に定着して行けば、リスク評価はもっとスムーズに進めていけるのではないかな、と思っています。

中村委員:私が感じることは、「話の難しさ」です。科学者の方々はむしろ専門用語を駆使して論議する方が定義もしっかりします。だけどそれは、一歩外に出ると非常にわかりにくい。会議も議事録も公開する、その透明性は重要だけれども、せっかくハイレベルな議論をしても、それをどう理解してもらうかということについては、まだまだ大きな課題ではないかと思うんですよ。

寺尾委員:ただ、科学的な根拠を可能な限りわかりやすく説明するという、それだけではどうもだめなのではないかなと。たとえば、コンビニの何々を豚に食べさせたら全部流産した、なんていうとんでもない報道が時々ありますが、そういう情報を、世の中の人には重く受け止めるというか…。ですから、これからのリスクコミュニケーションというのは、もう少し幅広く情報を集め、「そんなことはあり得ないんだ」と、科学的にはおかしいということをきちんと説明したりする必要もあるように思いますね。

食の安全に厳しい国民へ、さらなる信頼の浸透を

寺田委員長:食品安全委員会のこの二年間は事業で言えば「創業」の時期。これからはこの信頼を維持し、さらに良い方向へ動かして行く「守成」の時



寺田委員長

期だと思います。そんな三年目に向けて、大臣から総括を。

棚橋大臣:食品安全委員会では、先般の国内牛に関するBSE問題についても、全国47のすべての都道府県において意見交換会を開催し、科学的な評価を消費者の皆様方に伝えていただいたことで、食の安全に対して世界一厳しい日本国民の信頼を、勝ち得ていると思っています。それからリスク評価ですが、食品安全担当大臣としての私の仕事は、食品安全委員会あるいは各専門調査会が、中立公正に、科学的知見に基づいて議論をしていける、そういう場を守っていくことだと思っています。その結果としての国民の信頼、これがさらに浸透していくことを願っておりますし、担当大臣として、微力ではありますが、そうした環境整備に努力したいと思っています。皆様のこの二年間のご努力に心から敬意を表するとともに、今後も食品安全行政に対してぜひご尽力を賜りますよう、お願い申し上げます。

第102回食品安全委員会 出席者

- 棚橋泰文：食品安全担当大臣
- 寺田雅昭：食品安全委員会委員長
- 寺尾允男：食品安全委員会委員長代理
- 小泉直子：食品安全委員会委員
- 見上 彪：食品安全委員会委員
- 坂本元子：食品安全委員会委員
- 中村靖彦：食品安全委員会委員
- 本間清一：食品安全委員会委員
- 吉川泰弘：プリオン専門調査会座長
- 佐藤 洋：汚染物質専門調査会座長